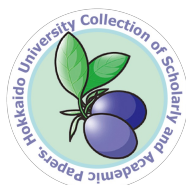




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1930年代のブリヤートの言語政策：文字改革、新文章語をめぐる議論を中心に
Author(s)	荒井, 幸康
Citation	スラヴ研究, 52, 145-176
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39074
Type	departmental bulletin paper
File Information	52-006.pdf



1930年代のブリヤートの言語政策

—文字改革、新文章語をめぐる議論を中心に—

荒井 幸 康

はじめに

本稿はブリヤート人たちの言語にとって大きな転換点となった1930年代の言語政策、特に文字政策と文章語の基礎となる方言に関する政策の流れについて検討するものである。

ブリヤートはシベリア、バイカル湖周辺に住むモンゴル諸族の一つである。彼らは17世紀初めから終わりにかけて段々とロシアの支配下に入った。1727年のキャフタ条約により清とロシアの間に国境がひかれ、清の支配下に入ったモンゴルとは独立した社会制度を彼らは作り上げてゆく。とはいえ、国境が完全に人を遮断するわけではなく、移民との争いや、役人たちの収奪、戦争や革命などの結果移住し、現在、モンゴルや中国に住むブリヤート人たちが存在する。

1930年代、ブリヤート人たちが自分たちの言語を表すために使っていた文字は、モンゴル文字からラテン文字へ、その後、ラテン文字からキリル文字へと変わってゆく。その文字によって書き表される文章語のもととなる方言も、最初、ハルハ方言であったが、セレンゲ方言へと変更になり、次いでセレンゲ方言からホリ方言へと変わってゆく。もともと彼らはモンゴル語で書いていたときはそれほど問題なく南にあるモンゴルやその他のモンゴル文字使用地域とある程度の地域差はあるが理解しあえる文章語を持っていた。しかし、こうした度重なる変更の結果、1940年代はじめには文字やアルファベット、そして正書法もモンゴルと違うものを持つこととなる。

1929年から始まる10年間という極めて短い期間にどのような議論がなされ、どのように言語を表す方法を変えていったのか、ブリヤートの言語政策において中心的な役割を果たしたB. バラーディン、H. ポッペの行動に触れつつ検討してゆきたい。

ブリヤートの言語政策に関する文献としてまず真っ先に挙げなければならないのはモン・トゴメリーの『ブリヤート言語政策、19世紀—1928：帝政とソヴィエト連邦における民族の施策のケース・スタディ』である⁽¹⁾。この論文は題名の通り1928年までのブリヤートにおける言語政策を扱ったものである。本稿で扱う1930年代のブリヤート語をめぐる言語政策はこの論文の続きを書いたものといえる。1929年以前の資料を参照するにあたってこの論文を参考にした箇所は少なくない。しかし、1928年までの時期においては、言

1 Robert Walker Montgomery, *Buriat Language Policy, 19th c.-1928: A Case Study in Tsarist and Soviet Nationality Practices* (Michigan: UMI Dissertation Services, 1994).

語や文字の改革案は出されたものの、それほど大きな運動へとつながらず、また、政府の承認を受けておこなわれた組織的な言語改革もなかった。モントゴメリーの論文においては言語改革運動の大きな理由となった学校における言語教育問題や、仏教寺院、キリスト教の教会での教育言語の問題、さらに革命後の職場での言語教育問題が中心的に扱われている。しかし、識字教育に関しての言及はない。言語教育問題は、1930年代においても重要な問題といえるが、本稿ではラテン文字化やキリル文字化によって新たに必要となったアルファベットや文章語の基となる方言の制定など、新しい文章語の成立の問題に絞って検討してゆく。

また、言語政策に関する論文の中で最も早いものとして挙げられるのは、1936年のダンピロンの『ブリヤート・モンゴル言語建設決算報告』である⁽²⁾。この論文はホリ方言の採用を決定しモンゴル語との関係を絶つ決定的な役割を果たした1936年の言語学会議で発表されたものであり、1936年当時までのブリヤートにおける言語建設の概説と、それに対するその当時の評価が述べられている。

シャグダロフの『ソヴィエト期のブリヤート文語の統一規範の確立』は、ソヴィエト期のブリヤート語の文章語の確立に至るまでの変遷を文字と音声、正書法、正音法、形態論、統語論、語彙、方言と文章語などに分けて検討した作品である⁽³⁾。モンゴル文字からラテン文字へ、ラテン文字からキリル文字へ変化したことによってブリヤート語の正書法にどのような変化が生じたかが言語的に検討されている。

またツェデンダンバーエフの「ブリヤートにおける言語建設の総括と焦眉の問題」は1926年から発表当時に至るまでのブリヤート語政策の流れが検討されている⁽⁴⁾。当時からすでに問題となってきたブリヤート語話者の減少の根本にあったのは何かを探ることを目的に書かれた。時代区分的にも本稿と重なり、参考にしたところが多々あったが、ラテン文字化政策の発端に関する言及など新たに書き加えるべき点があると考えられる。

ソヴィエト崩壊後に出されたブラーエフの「ブリヤート語の現状とその保持と改良の方法」ではモンゴル諸方言においてのブリヤート語の位置づけから始まり、ブリヤート民族とその言語の成立に関して、フォークロアなどを用い、トルコ語やトゥングース語との接触によって言語の独自性が生まれたことなどを概観した後、ブリヤートのロシア併合以降の言語的状況が簡単に述べられている⁽⁵⁾。さらに、革命以降にブリヤート語の言語状況がどのように変化したかについて概観し、その危機的状況を述べ、法的な保障を求めている。この当時まだブリヤート共和国憲法によるブリヤート語の国家語としての規定はなかったので、この論文はブリヤート語に国家語としての要求をしたものでもあった。

また、最後に田中克彦氏の『言語の思想』を挙げねばならない⁽⁶⁾。当時の制限された資料の中からソヴィエトやブリヤートの言語的な思想や活動などを追っていたため、出版当

2 Дампилов И. Итоги языкового строительства Бурят-монголии. Улан-Удэ, 1936.

3 Шагдаров Л.Д. Становление единых норм бурятского литературного языка в советскую эпоху. Улан-Удэ, 1967.

4 Цыдендамбаев Ц.Б. Итоги и насущные проблемы языкового строительства в Бурятии // Труды Бурятского института общественных наук БФ СО АН СССР. 1973. 19. С. 61-87.

5 Бураев Д.И. Современное состояние бурятского языка и меры его сохранения и совершенствования // Социоллингвистические исследования в Бурятии. Улан-Удэ, 1992. С. 3-15.

6 田中克彦『言語の思想』日本放送協会、1975年。

時においては背景にあるイデオロギーが批判され、現在においては資料不足が批判されているが、ブリヤートを含めたモンゴル諸族における言語政策に関して非常に示唆に富んだ内容を含んでいる。

本稿では、まず、1 として 1930 年代のブリヤートにおける言語政策の前提となるそれ以前の状況を概観する。次に 2 としてラテン文字化期の政策を追ひ、最後に 3 としてキリル文字化期の言語政策を検討する。

1. 言語状況および思想的背景

ここでは 1929 年、キリル文字化政策が開始されるまでのブリヤートにおける言語状況の背景および思想的背景を検討する。まずは言語状況的背景 (1-1) を検討し、続いて思想的な背景を文字・言語改革運動がどう展開されようとしたのかを、ロシア革命前の文字改革の試み (1-2) と革命以後の言語政策 (1-3) に分けて検討したい。

1-1. 言語的状況

ブリヤートには大きく分けると三つの方言が存在する。東部方言、西部方言そして南部方言である。

南部方言は、国境を隔てた南のモンゴルの諸方言にかなり近い言語的特徴をもった方言である。東部方言と西部方言には動詞に人称をあらわす語尾が付くが、南部方言には付かない。また、南部方言には /ts/ という音素があり、東部方言、西部方言にはない。逆に東部方言、西部方言には /h/ の音素があるが、南部方言にはない、などの特徴がある。ラテン文字化の議論にも出てくるが、南部方言の /ts/ の音素には東部方言、西部方言の S の音素が対応し、東部方言、西部方言の /h/ の音素には南部方言の /s/ が対応する。これを表にまとめれば以下になる。

南部方言 > Tsagaan (白) 東部方言、西部方言 > Sagaan (白)

南部方言 > Usan (水) 東部方言、西部方言 > Uhan (水)

また、東部・南部方言と西部方言には語彙的に大きな違いがある。これは東部・南部方言地域が仏教を受け入れた地域であったのに対し、西部地域には、1853 年ニコライ一世により「ラマ教団法規」が出され、仏教の布教が禁止されたためであると考えられる。

1930 年代以前、ブリヤート人たちが使っていた文字はモンゴル文字、チベット文字、キリル文字などである。

モンゴル文字を使うことのできたブリヤート人の最も古い記録は、1685 年イルクーツク要塞にカルムイクのプシュト・ハーンの使者が「ムンガル語」で書かれた国書を携えてきたとき、それをロシア語に翻訳した「プラト人サルバイコ」である。

モンゴル文字はチベット仏教とともに 17 世紀頃、南のモンゴルからブリヤートに入ってきたといわれる。そのため、この文字で書かれた文献は仏教関係のものが圧倒的に多い。

その後 1740 年の「草原管理局」や 1822 年にスペランスキーの改革によって導入され

た草原議会のシステムにより、公文書や議事録、草原法やその他の法規もこの文字によって書かれるようになり、さらに地域毎に年代記も残されるようになった。

また、モンゴル文字によってブリヤート人はモンゴル人たちのあらゆる様々な文献に触れることもできた。北京や、ニースレル・フレー（現在のウランバートル）などで出版されたモンゴル文字による書籍や仏典などもブリヤートに流通しており、逆にブリヤートで出された書籍も他地域で読まれていた事実もある。

このようなモンゴル文字の伝播にはチベット仏教が大きな役割を果たしたといわれるが、チベット仏教寺院でモンゴル文字よりもさらに高い地位にあったのがチベット文字である。

モンゴル文字の教育はチベット語によって主だった教義を修得した後で初めて施されるものであった。よって、モンゴル文字を知らなくても、チベット文字をしっかりと学んだ者が多くいた。このためロシア・モンゴル間の貿易の記録文書や個人的な手紙やメモなどをチベット文字でブリヤート語の音をあてながら書いたという記録が残っている⁽⁷⁾。また、サンスクリット語を知る者もいたと主張する者もいる⁽⁸⁾。

しかし先述の通り、パラガンスク、イダ、クダ、ヴェルホレンスク、オリホンといった西ブリヤートには仏教の布教が禁止されたため、モンゴル文字やチベット文字は広まらなかった。

西ブリヤートにおいては、モンゴル文字の修得が妨げられた一方で、それ以前からロシア人との交流によって、ロシア語とそれを表現するキリル文字を習得するものが現れる。中にはキリスト教徒になる者も出てきた。その中からキリル文字によるブリヤート語の表記を考える宣教師が出てきたのは1830年代のことであった。こういったロシア人との接触や、ロシア語を学ぶ機会の多かった西ブリヤートにとっては、それが整備された文字体系を持ったものでないにせよ、東ブリヤートにおいてチベット文字がそうであったように、キリル文字が民族語を表す文字を持たなかった彼らの覚え書きなどに使われたのである⁽⁹⁾。

1-2. 文字改革の試み（ワギンダラー文字、ラテン文字）

1822年草原議会が成立し、自治を享受してきたブリヤートであったが、移民の流入や所有できる土地の制限が設けられ、さらには1901年に行政単位の改革により草原議会が廃止されるなどの一連の出来事は、ブリヤート人たちの生活基盤である遊牧業にかなりの打撃をもたらした。

このような中、ブリヤート人の中にも民族意識が高まってゆく。自らの民族を近代化するにあたり、言語をどう近代に適應させてゆくかに関して議論されるようになり、言語の改革を主張する者たちが現れる⁽¹⁰⁾。

一つが、II. ジャムツァラノーやアグワン・ドルジエフ主導のモンゴル文字の改革を志

7 Montgomery, *Buriat Language Policy*, pp. 89, 97.

8 Чимитдоржиев Ш.Б. Кто мы - Бурят-монголы? Улан-Удэ, 1991. С. 27.

9 Елаев Н.К. Бурятская школа. Истории, проблемы и опыт национализации. Улан-Удэ, 1994. С. 31.

10 Ринчинэ Г.Р. К проблеме латинизации монгольской письменности // Жизнь Бурятии. 1929. 2. С. 60-62.によれば1902年のことだという。

向する人々であり、もう一つがバザル・バラディンや M. ボグダノフ主導のラテン文字を導入しようとするグループであった。

前者の活動に積極的に関わり、新しく文字を作り上げたのがアグワン・ドルジエフであった。彼はチベット仏教の僧侶であったが、チベットをめぐる外交問題にも積極的に関わった人物である。

彼は、1648年、チベット仏教の僧侶ザヤパンディタが発音をより正確にあらわすためモンゴル文字に修正を加えて作ったトド文字を参考にしながら、ブリヤート語特有の口蓋化子音、摩擦音の *z*, *z*, そして咽頭音の *h*、長母音を表す記号などを表す文字を作り上げた。また、このアルファベットの中にはブリヤート語音の他に、ロシア語の音を写す文字も含まれている。

1906年5月、啓蒙活動家ジャムツァラノーを中心として東西のブリヤート人教師や民族教育活動家によって結成された同盟「ブリヤート民族の旗」はこのワギンダラー文字による教育を決め、モンゴル文字を高学年の授業科目として教えることを決めた⁽¹¹⁾。1910年、ワギンダラー文字で出版されたアマガエフとアラムジ・メルゲン（エルベク・ドルジ・リンチノ）の著作には「(ワギンダラー文字は) しっかりと有機的に根を下ろし始めた」と書くほどまでになっていたようである⁽¹²⁾。

一方、ラテン文字化の具体案を提出したのはバザル・バラディンであった。彼は1878年に生まれ、ブリヤート人啓蒙活動家バドマエフがブリヤート人子弟にむけて建てたペテルブルグの学校で学んでいる。1900年にはブリヤート人商人の通訳としてドイツ、スイス、イタリアを回り見聞を広めた経験も持つ。1902年から、ペテルブルグ大学の聴講生となり、1905-7年、チベット仏教寺院であるラブラン寺にて調査をおこなった。1908年から10年間はペテルブルグ大学でモンゴル語の講師も務めた。革命後、ブリヤートに戻り、ブリヤートにおける文部大臣や学術研究所の所長をも務めた人物である。彼は1930年代、ブリヤートにおけるラテン文字化政策においても重要な役割を演じる。ラテン文字でブリヤートのことばを表記する案を彼はすでに1905年に考えていたという⁽¹³⁾。

1910年、バラディンは彼自身やジャムツァラノーなどによって収集されたブリヤートの民話集を出版する。『ブリヤート口承文芸選 (buriaad zonoï uran eugeiïn deejî)』である。本書はラテン文字で表記された38頁の薄い本であったが、10編の物語が収められている。それらはクダ方言 (I)、オレホン方言 (II)、アラル方言 (V-VI)、そしてホリ方言 (III-IV, VII-X) といった様々な方言をラテン文字で表記し、収録したものであった。ロシア語で書かれた前書きには、この本はブリヤートの民話をラテン文字で「転写」したものであると書かれているが、ブリヤートの人々に向けてラテン文字で書かれた「後書き」には別の理由を記している。

11 Бурятские учителя на съезде учительских союзов // Сибирские вопросы. 1907. №18. С. 22-23.

12 Амагаев Г.М. Матвей Иннокентьевич Амагаев. Улан-Удэ, 1997. С. 5; Montgomery, *Buriat Language Policy*, pp. 158-159.

13 Понне Н.Н. Бурят-монгольское языкознание. Л., 1933. С. 95.

モンゴル文字ではブリヤート語を書くことができないので、学び、書き、そして出版するときの簡便さを考慮し、ラテン文字を用いて、新しいブリヤートのアルファベットを用いて作成した。この本の中にあるような物語を、話したときに理解しやすいブリヤート語で読み書きできるのであれば、どれだけ学習が簡単になるかということの例として、この物語集を編纂し、本にして出版したのである。このような考えから新しい文字を作成し、このような小さい本を書いたのは古いモンゴル語の本や文字を置き去りにし、忘れさせるためではない。逆に、知識をブリヤート語で最初に修得させることが、ブリヤート語の本や、モンゴル文字や全ての知識を簡単に読みこなすことができるようになるためのただ唯一の窓なのだという考えから作ったものなのである⁽¹⁴⁾

彼の創作したアルファベットにおいて特徴的なのは、ブリヤートのことばを表記するのに使う文字を 24 文字としてアルファベット 26 文字以内に収め、発音を一つの文字で表現しきれない場合には母音あるいは子音を組み合わせて対応し、外に特殊な文字を設定しなかったことである。文字を組み合わせてある発音を表現するのは、彼の知るドイツ語、英語、フランス語においてもみられる。後にロシア革命以降、再度ラテン文字化を提案する際、彼は利点の一つとしてタイプライターや印刷の技術に適應している文字であると繰り返し述べているのは、他に記号の付かない 26 文字のアルファベットに抑えることによって、イギリスなどからタイプライターを直接輸入することができることなども考えていたのではないかと考えられる。

なお彼はアグワン・ドルジエフと別々の方向性を持った文字改革案を出すことにはなかったが、お互いに仲が悪かったわけではないようである。それは 1905 年、アグワン・ドルジエフが最初に出版したワギンダラー文字案の著作にも見えるし、モンゴル文字を修正する方の立場をとったジャムツァラノーが彼の著作の題字にバラードインのラテン文字を使っていたことにも見える⁽¹⁵⁾。II. ジャムツァラノー、B. バラードイン、アグワン・ドルジエフなどによって設立されたナランという出版社ではワギンダラー文字による本が数冊出されている⁽¹⁶⁾。両グループはお互いそれぞれの立場を主張しながら、ともに民族を発展させるという共通の目的を持ち、協力関係にあった。

しかし、ここで提案されたワギンダラー文字案も、ラテン文字化案もその後大きな運動を生むことはなかった。

一つは保守的人々の反対や、文字の導入後に第一次世界大戦がすぐに始まってしまったことなども原因の一つと考えられるが、さらに大きいのは金銭的な問題であろうと考えられる。また、モントゴメリーは何らかの理由でアグワンドルジエフはワギンダラー文字による改革の熱意を失ってしまったらしいことも一因としている⁽¹⁷⁾。

14 Baraadiiin B. Buriaad zonoï uran ugeuiin deej. СПб., 1910. p. 38.

15 1998 年 3 月 11 日、ブリヤート文学博物館職員サランゲレル (Сарангэрэл) 氏による同博物館展示品の解説による。

16 История отечественного востоковедения с середины XIX века до 1917. М., 1997. С. 368-369.

17 Montgomery, *Buriat Language Policy*, p. 160.

1-3. ロシア革命以後

1917年ロシア革命以降、シベリアの諸民族にも自治政府を成立させる動きが現れてくる。ブリヤートに関しては、内戦や日本のシベリア出兵などの混乱を経て、ようやく1923年春、東西が合併した形でブリヤート・モンゴル社会主義自治共和国が成立する⁽¹⁸⁾。

また、民族自治の一環として民族語による自治に関する議論も盛んになる。1917年よりロシア革命と共に民族教育に関する様々な議論がなされるが、このころにはほぼモンゴル文字を教えるのが既定路線になっていたようである⁽¹⁹⁾。1923年9月12日に採択された「ブリヤート・モンゴル自治共和国の国家構造に関する規定」では、ブリヤート・モンゴル語とロシア語は平等であると明記され、学校における民族語教育も実現化されていく⁽²⁰⁾。しかし西モンゴルにおいては資材不足、金銭不足、人材不足などにより充実したモンゴル文字の教育がおこなえないため、自分たちの知っているキリル文字を使って自分たちのことばの教育をおこなおうとする動きも現れはじめた。

1924年7月、西ブリヤートにあるボハン・アイマク⁽²¹⁾にて民族語をあらわす文字として圧倒的多数の参加者がキリル文字の使用に賛成したというエピソードや、西ブリヤートで教師をしていたウブグノフのキリル文字による民族語教育の主張などがその一例である。とくに、ウブグノフは1920年代の終わりまでキリル文字表記を主張したという⁽²²⁾。

革命前にラテン文字化を主張したバラーディンは、革命後、モンゴル文字により文学作品や教科書などを著すもののその主張を変えることはなかった。1926年9月19日-27日、ヴェルフネウディンスクにおいてブリヤートにおける文化建設の問題を議論する文化民族会議においてバラーディンは「モンゴル語文化の向上に関する問題」、「ブリヤート・モンゴル民族学校とその課題」という二つの報告をおこなっている。

1910年の時の主張とは違い、ブリヤートの諸方言を書き表すものとして使うのではなく、モンゴル諸族全体が使用する文字としてラテン文字を使用すべきであるとし、そのため、ブリヤートの方言ではなく、モンゴルの中心的な方言となるハルハ方言を表記すべきことを主張した。ハルハ方言をモンゴル共通の文章語の基礎として採用する理由として、バラーディンは「他のモンゴルの諸方言と比べると、文法的な形の簡便さと安定性から見て、より発展した言語であり、もっとも（モンゴル語諸方言の全ての話者にとって）中央に位置する、わかりやすい言語である」ことを挙げている⁽²³⁾。

18 1958年までの正式名称はブリヤート・モンゴルであった。1958年、「モンゴル」が除かれブリヤート社会主義自治共和国となるが、それと同時に言語名もブリヤート・モンゴル語からブリヤート語へと変更され、現在に至っている。

19 Montgomery, *Buriat Language Policy*, pp. 170-176.

20 Варнавская П.К., Дырхеева Г.А., Скрынникова Т.Д. Бурятская этничность в контексте социокультурной модернизации (конец XIX - первая треть XX веков). Иркутск, 2003. (http://mion.isu.ru/pub/buryat/3_1.html)

21 アイマクとは地区をあらわすブリヤート語。現在はライオン(район)に置き換えられている。モンゴルにおいては現在も使われ、日本語には「県」と訳されている。

22 АБНЦ (Архив Бурятского научного центра), ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 111; Montgomery, *Buriat Language Policy*, pp. 275-276.

23 Барадин Б.Б. Вопрос квалификации монгольской языковой культуры // Сборник материалов первого культурно-национального совещания Буреспублики. Улан-Удэ, 1926. С. 10.

ラテン文字化の主張に賛成の立場にいたものや、原則的に支持する立場をとったものもいたが、会議に集まった多くの人々はラテン文字化に反対の立場をとった。そのような反対意見には以下のようなものがあった。

- 1) ラテン文字は文盲一掃運動を遅くさせる
- 2) モンゴル人民共和国で出版された書籍が使えなくなる
- 3) (モンゴル文字は)「土着化」されつつある諸機関でも充分、要求されるものにたえられる⁽²⁴⁾
- 4) ラテン文字化を採用すれば、みな自分が喋るように書くので、正書法をつくることは不可能になる。モンゴル諸語、諸方言の差を過小評価している
- 5) モンゴル文語の欠陥は少々の正書法改革で克服することができる
- 6) 西ブリヤートの人々は民族の文字(モンゴル文字)を学ぶことを熱望している⁽²⁵⁾

また、後にブリヤート文学の父といわれる作家ホツァ・ナムサラーエフのように、ブリヤートのことばではなくモンゴルのハルハ方言を採用することに反対という者もいた⁽²⁶⁾。

結局、この会議ではモンゴルとの言語的な結びつきを重視し、モンゴル文字を維持することが確認され、バラーディンの意見は否定されることとなった。

こうして2度目のラテン文字化の提案も却下された。しかし、ソヴィエト全体においてラテン文字化の波が起きていた。ブリヤートもこのような「外圧」の力を借りて遂にラテン文字化に乗り出すときが近づいていた。

2. ラテン文字化運動期 (1929 ~ 1938)

2-1. 予兆

1928年の初めにはモンゴル文字を維持しようとする姿勢がまだ見られた。例えばΓ. リンチネは『ブリヤートの生活』誌で「ブリヤート・モンゴル語文化の問題」を発表し、モンゴル文語の正書法を標準化し簡単にしようと主張していたし、Γ. ツィビコフも「民族文化の武器としてのモンゴル文字」というモンゴル文字支持の論文を出していた⁽²⁷⁾。

ソ連邦中央の政策としてラテン文字化の議論がブリヤート語に至るのは、1928年12月6日から16日にかけておこなわれた第6回ブリヤート地方委員会会議である。この時、会議の代表者の一人ドルジ・アルディンがラテン文字化を主張した者を批判したことに、オシロフという別の参加者が以下のように発言している。

レーニンがラテン文字化が東方の革命であるといった。このことばをテュルク系の人々やアラビア文字にのみ当てはまることばと考えてはならない。レーニンのことばは我々にも当てはまる

24 「土着化」とは少数民族の居住する地域において政府その他の諸機関でその少数民族の言語を使用し、人材を登用することを行う。ここで「土着化されつつあるとは」ブリヤート人によりブリヤートのことばで行政その他の運営がおこなわれることを意味する。

25 Montgomery, *Buriat Language Policy*, pp. 285-286.

26 Montgomery, *Buriat Language Policy*, p. 286.

27 Montgomery, *Buriat Language Policy*, p. 291; Цыбиков Г.Ц. Монгольская письменность, как орудие национальной культуры // Бурятияведение. 1928. №1-3. С. 11-27.

のだ。結果的にいえば民族民主主義者バラディン同志はこの問題に関してアルディン同志よりも前衛的な位置にいる。(しかし)私はすぐにラテン文字化を宣言すべきだと言っているわけではなく、(これから先)ラテン文字へ移行する途をとらねばならないし、改革を広めなければならないと言っているのである⁽²⁸⁾

この会議では何の進展もなかったが、1929年にはラテン文字化運動がブリヤートにも到来するのである。

2-2. 二つの計画

ブリヤート学術センター(Бурятский Научный Центр)の公文書館にある諸資料はブリヤートにおけるこの時期のラテン文字改革の進行状況を教えてくれる。まず、最初の活動として目に付くのは1929年当時のブリヤート・モンゴル学術委員会(委員長、バザル・バラディン)が1月26日に新テュルク・アルファベット中央委員会にラテン文字アルファベットに関する資料を依頼している文書である⁽²⁹⁾。

続いてポッペが3月9日、ブリヤート学術委員会にラテン文字の計画に関する質問を書いた手紙が現れる。

ニコラス・ポッペ(ロシア名ニコライ・ニコラエヴィッチ・ポッペ)は1897年、天津のロシア帝国領事の息子として中国で生まれた。ペテルブルグ大学東洋学科でルドネフ、ウラジーミルツォフ、ブルドゥコフといった名だたる学者と出会い、モンゴル諸語やテュルク諸語を学ぶ。1925年には29歳の若さですでにレニングラード大学の教授となり、1932年にはアカデミーの準会員にもなっていた。1942年、ポッペは北カフカス地方滞在中にドイツ軍の占領を受ける。1943年、退却するドイツ軍とともに彼はドイツへと逃亡し二度とソ連の地を踏むことはなかった。回想録によれば、彼がドイツ軍の通訳として働いたことが後で何らかの罪に問われることを恐れたとあるが本当の理由はわからない。第二次世界大戦後、さらに彼はアメリカへと移住し、1991年に94才で亡くなるまでシアトルで過ごした。1930年代、彼はバラディンと共にブリヤートにおける言語政策の中心的な役割を果たす人物である。

この手紙の内容は以下の通りである。

ブリヤート・モンゴル学術委員会各位

このお手紙で私がお話ししたいのは、私がメンバーとして参加している新テュルク・アルファベット中央委員会が私にラテン文字によるブリヤート・モンゴルのアルファベットの計画を作成して欲しいと依頼してきたことです。この際、中央委員会は、この要請はブリヤート学術委員会からの依頼であると言っておりました。この問題(アルファベットの作成計画)に関して私とは連絡を取らなくてもよいとお考えなのでしょうか? このことに少々驚きを感じます。一応、私

28 Montgomery, *Buriat Language Policy*, p. 292.

29 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 58.

は第三者の手からアルファベット案作成という仕事の依頼をうけ、中央執行委員会にアルファベット案作成を引き受けることを伝えて、ブリヤートにおける文章語とアルファベットに直接関係する重要な仕事に取り組んでいるのですから。また、このような計画案の要請元である学術委員会に早急に以下の情報を伝えていただけるよう要請いたします：

1、アルファベットは狭くブリヤートのみあるいは広く他のモンゴル諸族にも使えるようモンゴル、ブリヤートに提案されているものなのか？

2、ブリヤート語の特徴のみ考えなければいけないのか、それともモンゴル語のそれも考慮しなくてはならないのか？ もしブリヤート語のみであるならば、**ᠠ**、**ᠡ**の二つなしでも大丈夫でありましょう。ブリヤート語とモンゴル語ならば、**ᠠ**と**ᠡ**（にあたる文字）をブリヤート語では**III**と**c**と読ませる形で、モンゴル語ではそのまま**ᠠ**と**ᠡ**という音価を持たせて導入する必要があるでしょう。

3、正書法は音声学的にしなければならないのでしょうか、あるいは語源解的にしなければならないのでしょうか？

4、学術委員会自体はどのようにお望みでしょうか？

1929年3月9日 ポッペ⁽³⁰⁾

ここから、ポッペは新テュルク・アルファベット中央委員会の依頼でモンゴル諸語用のラテン文字化案を作成しようとしていたことがわかる。また、新テュルク・アルファベット中央委員会は、この依頼がブリヤート学術委員会によるものであると彼に説明したらしい。しかし、ポッペは何らかの形でブリヤート学術委員会がラテン文字化計画を進めていたことを知り、驚いて手紙を送ってきたようである。

なお、この少し前の時期のポッペの活動に関しても1929年1月頃、ブリヤート学術委員会にあてた一連の書簡が残っている⁽³¹⁾。その内容は彼がかかっていた病気の病状の説明やアラル方言調査の研究の経過などについてであり、そこにはラテン文字の作成に関することは何一つとして書かれていない。また、1928年に出た論文ではモンゴル文字をブリヤートが使っていることを評価していることから、ラテン文字化の作成は、少なくともその論文が書かれた時より後に依頼されたということは明らかであろう⁽³²⁾。

ブリヤート学術委員会はポッペからの手紙に対して3月27日にとりあえざる返答を出している。そこには3月31日から4月16日までの間にポッペの質問に答えるということ、6月の初めにポッペが調査のためブリヤートへ来る際に、会って話をしたいということが手短かに書かれている⁽³³⁾。

4月8日付となっている以下の手紙のコピーは、その回答なのであろう。

30 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 69.

31 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 1-16.

32 Понте Н.Н. К изучению бурятских говоров // Жизнь Бурятии. 1928. №10-12. С. 95.

33 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 72.

H.H. ポッベ同志

親愛なるニコライ・ニコラエヴィッチ様

新テュルク・アルファベット中央委員会があなたに（ラテン文字化案を）依頼したという報せは我々にとって、あなたがこの手紙を受け取ることよりも不可思議なことでありました。我々は新テュルク・アルファベット中央委員会にこの件の研究を依頼しておりません。

ご理解いただきたいので申し上げますが、ラテン文字アルファベット計画準備に関しては今年の最初から我々ブリヤート學術委員会がおこなっておりまして。現在、計画はまとまりつつあります。近くこの問題についての（B. パラーディン作製の）パンフレットを印刷に出すつもりです。このアルファベットの最初の試案はこのパンフレットの出版をもって専門家たちや社会の審議にかけられます。そして、諸問題の多角的な議論の後、この改革の前進に向けての次のステップが初めてブリヤート自治共和国政府によって着手されるのです。

もうほとんど終わろうとしている私たちの計画の準備に助言の形であなたに参加していただけるよう要請しようと考えておりましたし、現在も考えております。

しかし、もしあなたが新テュルク・アルファベット委員会の申し出を受け入れ、この仕事を我々と平行しておこなうというのであれば、我々は何の異議も唱えるつもりはありません。その場合、結果としてできたものは一つ一つの文字の綴り方に関する最終的な改革の作製のための比較検討資料となるでしょう。

この件についてはもっと詳しくあなたと意見を交換したいと考えます。また、夏の調査が終わった頃に個人的にお会いしたいと考えております。

同志としての礼を込めて

ブリヤート學術委員会 B.B. パラーディン

學術書記 エスケーヴィッチ⁽³⁴⁾

しかし、ポッベが自分たちからだけの回答で満足しないのではないかと考えたからか、最初の手紙を出した 3 月 27 日に、自分たちで回答をする以前にアレクサンドル・イヴァノヴィッチなる人物に「ポッベ氏の問い合わせに困惑している。誰が HTA（新テュルク・アルファベット委員会）に依頼したのかわからないのでそう説明して欲しい」と説得への協力の手紙を出している⁽³⁵⁾。

しかし、こうした説得の試みも以後のポッベの行動から判断するなら、多分成功しなかったと考えられる。

いずれにせよ、ここで興味深いのは偶然にも二つの計画が同時に存在したという事実である。これはブリヤートにおいて計画が作成されなくとも、新テュルク・アルファベット委員会の指令で作成され、ラテン文字化が開始されていた可能性があったことを示唆している。

34 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 68.

35 АБНЦ, ф. 471, оп. 1, д. 64, л. 108о6-109.

2-3. ラテン文字化計画発表

このような中、『ブリヤートの生活』1929年第2号に言語学者Г. リンチネの「モンゴル・アルファベットのラテン文字化問題に向けて」という論文が発表され、ラテン文字化の主張の口火が切られる。

そしてついに、同年、バラードインとポッペは別々の計画を発表することになる。偶然か意図的なものかは明らかではないが、ラテン文字化をすすめる新テュルク・アルファベット委員会の機関誌である『東方の文化と文字』誌第5号には彼らの論文が同時に掲載されることになったのである。巻頭にはバラードインの「ブリヤート・モンゴル言語文化向上の諸問題」(3～27頁)が掲載され、続いて、ポッペの「新モンゴル・アルファベット作成の問題に向けて」(28～33頁)が載った。

2-3-1. バラードインの発表

バラードインはこの論文で具体的なアルファベット案には触れず、もっぱら、ラテン文字化が何故必要なのかを論じている。先のポッペへの手紙でアルファベット案はほぼ出来上がっており、社会の審議にかけられようとしていると書いているが、この論文には具体案がない。続くポッペの論文との間の整合性をもたすために編集者がそのような要請をバラードインにした可能性もあるが、真相は明らかでない。いずれにせよバラードインはラテン文字化の利点に関して、技術面と思想面にわけて論じている。

技術的な利点があるかについては：

- 1) モンゴル文字が縦書きであり数学、科学、音楽、数学の公式などを書く際に技術的に障害があるが、これを除くことができること
- 2) 外来語、他言語の音を書き表すことができること
- 3) 統一した正書法を確立することの簡便さ、読み書きの理論や実践の修得の簡便さ
- 4) モンゴル文字よりも印刷に関して非常に技術的に有利であること
- 5) タイプライターで文字を打つことができること、ヨーロッパの文字と同様の筆記体であること

とし、さらに思想的な利点については：

- 1) 技術的、文学的な作品を幅広く自由に作る可能性を持つこと
- 2) 多様な大衆の文盲一掃と啓蒙のため、言語技術的な障害を取り除くことができること
- 3) 労働者大衆の文化的な生活の全領域で言語を幅広く使用できる可能性が開けること
- 4) 知的創造に最適であり、より完全な武器として、話し言葉を視覚化した文字言語の創造の可能性を持つこと⁽³⁶⁾

と論じている。論点はほぼ1926年の発表と同じであった。1926年に彼が発表した時との決定的な違いは、新テュルク・アルファベット委員会というブリヤートの外にある機関

36 Барадин Б.Б. Вопросы повышения бурят-монгольской языковой культуры // Культуры и письменность Востока. Книга V. 1929. С. 22-23.

の存在であり、テュルク系のラテン文字化運動の勢いをブリヤートにも取り入れようとしていたことである。他のテュルク系民族のラテン文字化導入の経験や、ラテン文字化の指導者たちの経験を参考にすべきと主張したこと、さらにモンゴル諸語のラテン文字化擁護団体の組織化や大衆へラテン文字化を広める運動の組織化が必要と主張した点や、言語学の理論と実践の両面の調査研究が必要と主張した点が以前とは違っていた⁽³⁷⁾。

2-3-2. ポッペの発表

続いて載せられたポッペの論文は、ラテン文字化の具体案であった。

ポッペは1910年に出たラテン文字に関するバラディンの著作からヒントを得たことを認めたうえで、アルファベット案において文字と音素をどう対応させたかに関して、子音と母音に分けて説明している⁽³⁸⁾。

ここで重要なのは、ポッペがブリヤート語とモンゴル語を同じ文字体系で書き表すアルファベットを考案したことである。

たとえば、子音についてモンゴル語（ハルハ方言）で ч 、 ц 、 дж 、 дз で発音されるところが、ブリヤート語では ш 、 с 、 ж 、 з になることから、

ハルハ	ц/ts/	ч/ch/	дз/j/	дж/j/	с/s/
	↓	↓	↓	↓	↓
ブリヤート	с/s/	ш/sh/	з/z/	ж/j/	h/h/

という図式を立て、ハルハ方言 ц/ts/ と読むのであればブリヤートでは с/s/ と読むようにすればよいと述べている。また、モンゴル文章語の正書法規則に基づいて、ある子音の後に i をつけると別に発音になることから<図1>の様に読ませることも可能と述べている。

<図1>

新テュルク アルファベット	ハルハ・モンゴル語の発音	ブリヤート語の発音
ç	/ts/	/s/
çi	/ch/	/sh/
c	/dz/	/z/
ci	/dj/	/j/
s	/s/	/h/
si	/sh/	/sh/

37 Барадин. Вопросы повышения. С. 24.

38 Поппе Н.Н. К вопросу о создании нового монгольского алфавита // Культуры и письменность Востока. Книга V. 1929. С. 29.

こうして作られたのは次のようなアルファベットである。

＜図 2＞ 1929 年にポッペの提案したラテン・アルファベット案

Таблица знаков нового алфавита.

А а	В в	С с	Ç ç	D d	E e
F f	G g	И и	J j	К к	L l
M m	N n	н	O o	Ө ө	P p
R r	S s	T t	U u	Y y	X x
V v					

(N. ポッペ「新モンゴル・アルファベット作成の問題に向けて」『東方の文化と文字』第V号 1929 年より)

後々のものから比べると、この時点ではポッペも、モンゴル文字とバラードインのラテン文字化案に確かに考慮が窺える。また、子音+i というアイディアを除けば、組み合わせて音を表現することはせず、ç や ө のような特殊記号を入れるのも特徴的である。

2-4. その後のラテン文字化正式決定までの経緯

こうして発表されたラテン文字化案が議論され、最初のアルファベット案の採用が決定されるのは 1930 年 2 月 26 日から 3 月 4 日にかけてヴェルフネウディンスクでおこなわれた「正書法会議」においてであった。

この会議には新アルファベット（つまりラテン・アルファベット）の宣伝とアルファベットの作成の諸問題に直接携わる人々 23 人とモンゴル人民共和国から二人の代表者が参加した。会議では四つの正報告と二つの副報告がなされた。当然、この会議にはポッペもバラードインも参加している。バラードインが「新文章語の形成に関する諸問題」と「新文章語の正書法の諸問題」という二つの発表をし、ポッペはΓ・リンチノとともに「ブリヤートとモンゴルのアルファベットの統一に関する問題」を発表した。また、議事録を見る限りにおいて、この会議で中心的な役割を果たしたのはバラードインであり、ポッペは、自分の案を提出するのみで、この会議においてあまり目立った発言はしなかったようである⁽³⁹⁾。

しかし、正書法会議で採用されたアルファベットは 1930 年 5 月にアルマアタでおこなわれた新アルファベット委員会総会では承認されず、テュルク諸語においてラテン文字によるアルファベット作成の際に取り決められた原則と同じ原則で作成するよう求められた。

1930 年 7 月 1 日、アルファベット問題はまだ揺れていたが、ブリヤート・モンゴル語を表す文字をラテン文字とすることがブリヤート・モンゴル中央執行委員会によって正式に採用される。

39 АБНЦ, ф. Р471, оп. 99, д. 99.

この問題の最終的な結論は、1931年1月10-17日モスクワにおいて開かれたモンゴル諸族言語・文字問題会議で出される。この会議ではブリヤート人の他、モンゴルやカルムイクといったモンゴル系諸族の言語学者や教育学者などが集まり、彼らが採用すべきモンゴル諸語統一アルファベットや正書法などが議論された。この会議によって、モンゴル諸語全てにおいて使われるべきアルファベットが決定されたのである⁽⁴⁰⁾。

2-5. 基礎となる方言選定の問題

ラテン文字に移行する前に使われていたモンゴル文字はそのころ700年以上の歴史を持つ文字であり、その文字で書かれたものはモンゴル諸族の人々の話すどの方言にも似ていないものであった。だから修得が難しく文字改革が必要だという意見が出たのだが逆にその利点を活かせという意見も出てくる。文字改革の議論の中で、ラテン文字やキリル文字が採用されると採用された方言と採用されなかった方言の間に不平等が生まれる可能性を示唆し、どの方言にも似ていないからこそモンゴル文章語はモンゴル人全てが使うことができる可能性がある、とモンゴル文字を擁護するロシアのモンゴル学者ウラジーミルツォフや「ブリヤート・モンゴル」紙の編集者ブリヤート人インノケンティ・マルコフのような意見も1920年代には現れている⁽⁴¹⁾。

逆に言えば、これはラテン文字化やキリル文字化の際にはどの方言を採用するのが大きな議論となって出てくる可能性があったことを示唆していた。

ラテン文字化当初、ブリヤート人が使用する新しい文章語とされたのはハルハ方言を文法的にも語彙的にも下敷きにしたものであった。1929年、ラテン文字化の口火を切ることになるリンチネの論文は「我々のブリヤート・モンゴル語は統一されたモンゴル語族の中で孤立した、独立した方言ではない。だから、ブリヤート語の文章語形成において近隣のハルハ・モンゴル語の直接的影響や、全モンゴル文学の伝統を無視するわけにはゆかない。ハルハ・モンゴル口語の影響は、ブリヤート語の中に極めて多く見受けられる全く不必要な文法的な特徴の簡略化において有益なものになるだろう」と述べ、ラテン文字化された言語の標準方言は複雑なブリヤート語の文法よりも「音声学的に、形態論的に統語論的にもっとも簡単で、モンゴル文語に最も近いハルハ・モンゴル語を採用する」ことを主張している⁽⁴²⁾。さらに何よりこの論文で「ブリヤートのもの」(Бурятия́зм)が敵視され、「モンゴル共和国とブリヤートの人的な、文化的な結びつきを強めれば、特に西ブリヤートにあるあらゆる「ブリヤートの」な文法構造が簡単になり、[煩わしさから]解放される」とまで書いている⁽⁴³⁾。

1930年2月におこなわれた正書法会議においても、文章語のもととなる方言をモンゴルのハルハ方言とすることに異論を挟む者はいなかったようである。

40 モンゴル諸族の統一アルファベットは決定されたが、カルムイク人はこの決定には従わなかった。カルムイクにおける1930年代の言語政策に関しては、荒井幸康「1930年代のカルムイクにおける言語政策」『日本モンゴル学会紀要』第35号、2005年（収録予定）。

41 КГА (Калмыцкий Государственный Архив), ф. РЗ, оп. 2, д. 1144, л. 18; Montgomery, *Buriat Language Policy*, p. 278.

42 Ринчинэ. К проблеме латинизации. С. 60-62.

43 Ринчинэ. К проблеме латинизации. С. 61.

1930年、ブリヤートの言語学者ボロドンはブリヤート自治共和国第一回最高会議で次のように述べている。

共通のモンゴル文語やその表現、個々の文字の形はブリヤートの子供には全く理解できない。子供たちは母語しか知らないのだ。学校の授業の一番はじめからしっかりとした言語政策を打ち立てる必要があり、段々とハルハ方言に近づけていくことを保証する政策を「打ち立てる必要があるのである」⁽⁴⁴⁾

このようなハルハ方言採用の動きは1931年、第三回共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会幹部会で、「王侯貴族の絶滅した言葉をブリヤートに広めようとする汎モンゴル主義」と批判された。しかし、幹部会は「ブリヤート・モンゴル労働者の生きた話し言葉から」離れてはならないとしながらも、新しく採用する文章語の基礎となる方言は「何よりも、ハルハ人民のことに一番近いセレンゲ方言」を採用することを決定したのである⁽⁴⁵⁾。

ここに至ってもまたモンゴルとの紐帯は意識されていた。セレンゲ方言の採用が決定されたこの1931年には言語学会議が二つおこなわれている。この会議は1931年当時のブリヤートにおける文章語の基となる方言をめぐる言語政策の状況を知る上では非常に重要である。

2-5-1. ブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議

1931年8月27日 - 29日、文化研究所言語文字局においてブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議がおこなわれた。

この会議においてブリヤート語学の現状と課題について話し合われ、特にブリヤート語に関する言語学的、理論的、および実践的な誤りが指摘された。また、近代的な術語の作成に関する問題や、正書法の改善などに関しても話し合われた。

この会議には、ポッペやポッペの弟子であったベルタガエフ（言語文化研究所）のほか、7人の学者、教師、ラテン文字化に携わる人々が参加した⁽⁴⁶⁾。

参加した人々の名前にバラードインはない。そのためか特にこの時にポッペがおこなったバラードイン批判は凄まじいものとなった。

この場でポッペが発表した「ブリヤート・モンゴル語学の現状」では、バラードインが1931年に著した『新ブリヤート・モンゴル文語の文法と文字に関する簡単な手引き』に対して、その著作に見られる文法と事実の矛盾などを指摘し、革命前にあった形式主義的な言語学に則っていると批判した。また、バラードインがその著書の中で「新ブリヤート・モンゴル語の文章語の内容は…（語彙的に）はブリヤート、ハルハ、そしてその他のモンゴル諸族などの全ての主要な方言の語彙の内容を総合し選び抜いたものでなければならない」と記したのに対して、マルの言語学を論拠に「このような理想を追求するような言語学は

44 Исаев М.И. Языковое строительство в СССР. М., 1979. С. 215.

45 О культурно-национальном строительстве // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №2-3. С. 16.

46 Дискуссия о современном состоянии бурят-монгольского языкознания // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №2-3. С. 44.

比較言語学的で、祖語というものをでっち上げている」のに等しいと語り、「この理論は極めて反マルクス主義的である」とも批判している⁽⁴⁷⁾。

同様に、ポッペの弟子であり、後にブリヤートにおける言語学研究をリードすることになる言語学者の一人ベルタガエフもこの会議で「事実上、モンゴル語とブリヤート語という二つの言語が存在するし、(この二つの言語は)発展の歴史的条件が違っただけでなく、規範も違うものである」と語り、この頃、主張されていたブリヤートには方言が存在し、言語は存在しないという意見に異議を唱えた。ハルハ方言を標準方言に据え、ブリヤート語の独自性を無視しようとしている人々に批判を加えたのである⁽⁴⁸⁾。

注目すべきなのは「ブリヤートの独自性」という言葉である。ここにいたって、いままでのハルハ方言との結びつきを強調していたものとは、明らかに異なる発言が出てくるようになる。

この会議においてポッペはブリヤートの共産党地方委員会がセレンゲ・ブリヤート方言を標準方言に決めたことに対して、バラーディンが書いたことをあげつつ、「ブリヤート語」と「ハルハ(・モンゴル)語」の要素から人工的に作り上げたでっち上げの言語ではなく、実際に存在するブリヤート・モンゴル語の方言であるので「正しいことであるし、適切である」と評価した。以前、ポッペはハルハ方言を標準としてアルファベットや正書法を作り上げるべきと発言していたはずだが、ここでは発言を翻している⁽⁴⁹⁾。

さらにポッペは、語彙がハルハ方言的特徴を持っていることに警告を発する。モンゴル文語に見えるような「封建的」特徴を持つ言語より、実際の「モンゴル語(ハルハ方言)」はもっと「ブリヤート語」に近く、今後、「ハルハのモンゴル語」と「ブリヤートのモンゴル語」に相互に交流が見られれば、双方にとってお互いの言語はすぐにも修得できる言語となるだろう。だから、語彙がよりブリヤート化することを恐れるべきではないと発言するのである。こうして、モンゴル文語との結びつきに関しても以前の発言を翻している⁽⁵⁰⁾。

また、これから語彙の選定の際に西と東のブリヤート語に共通の語彙を選ぶべきであると語る。それは様々なところから人が集まってつくられたコミュンやコルホーズのブリヤート人達のことばを観察した結果からの発言であった。彼は「現在のコルホーズは新しい言語の鍛冶場となっている」と言い、もうすでに東と西の間ではことばの交流が始まっていると語っている⁽⁵¹⁾。

しかし、「西ブリヤートはロシア語の新聞を読み、東はモンゴル語の新聞を読んでいるので、政治などについての会話をするとはっきりと両方が理解できるわけではない」とお互いの語彙の違いは文化的傾向なのだを示すことも忘れていない。そして西ブリヤートが取り入れている「国際的」な語彙、つまりはロシアで使われている語彙をブリヤート人のことばの中に取り入れてもいいのではと主張する⁽⁵²⁾。

47 Понпе. Н.Н. О современном состоянии бурят-монгольского языкознания // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №2-3. С. 50.

48 Выступление тов. Бертагаева // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. 2-3. С. 70-77.

49 Понпе. О современном состоянии. С. 53.

50 Понпе. О современном состоянии. С. 54, 57.

51 Понпе. О современном состоянии. С. 55.

52 Понпе. О современном состоянии. С. 58.

さらに、こうしてブリヤート語がもっと「国際化」されたのならば、モンゴル語も「国際化」されるだろうとも彼は述べている⁽⁵³⁾。

こうして、この会議では文章語のもととなる方言の問題、特にモンゴルのハルハ方言とブリヤートの諸方言の関係について主に話し合われた。また、それにとまなう語彙の問題に関しても以上のような批判的提案がなされた。ポッペのバラードイン批判はこの後も様々な形でおこなわれ、状況は次第にポッペに有利になっていくが、このころはまだ、ポッペに対する質疑応答の際に反論が出されており、みながポッペの側に立つということにはなかった。

また、この時期もハルハ方言に近いセレンゲ方言を標準方言としたことに対する反対は見られなかった。ブリヤートでおこなわれていることがモンゴルにも影響するという発言などから、モンゴルとブリヤートとの言語文化的な結びつきが許容されていたこともわかる。

次にブリヤート独自の文章語を作り上げる際にもう一つの重要な問題、つまりここでポッペがまさに指摘したブリヤート西部と東部の方言の問題について次にこの年の11月に行われた西ブリヤート言語文化向上会議での議論を検討することにしたい。

2-5-2. 西ブリヤート言語文化向上会議

1-1 で述べたとおり、ブリヤートはバイカル湖を隔てて東西で語彙的にかなりの差異がある。この問題が解決できなければ東西ブリヤートの言語的統一は危ういと考えるのは当然の成り行きであった。

1931年11月7日－9日、アラル・アイマクの中心地クイテで西ブリヤート言語文化向上会議がおこなわれた。この会議では「西ブリヤート諸県の民族文化建設の基礎的問題」(エグノフ)や、「西ブリヤート言語文化の向上の問題」(バラードイン、アバシェーフ)、「西ブリヤート言語文化向上の方法」(ポッペ)などの発表に関して議論がなされた⁽⁵⁴⁾。

この会議には30人以上の代表者がアラル、ボハン、エヒリット＝ブルガット、トゥンキンといった西ブリヤート4アイマク(地区)から集まった。

西ブリヤートが当時、いかなる言語的状況がどのような状態にあったのか、この会議中に語られた次のような発言から窺うことができる。

母語による公文書はまったく存在していない。

昨年度(1930-1931年)、西ブリヤート諸アイマクの学校教育はロシア語でほぼ、全ておこなわれた。

また全ての文化・啓蒙施設の業務はロシア語のみでおこなわれている。

現地のブリヤート人達の集会でもほとんどロシア語で会話されている。地方の新聞や壁新聞、スローガンは全てロシア語である。

53 Понпе. О современном состоянии. С. 55.

54 これらの発表は『ブリヤートの文化(Культура Бурятии)』誌の1932年第1号に載っているものを参考にした。

インテリゲンツィアやソヴィエト機関の下級職員は母語の価値を全く理解せず、ブリヤート語で公式文書記録や学校教育をおこなうことに懐疑的な目を向けている⁽⁵⁵⁾。

西ブリヤートの諸アイマクにおいてブリヤートのことばやラテン文字は、党の業務においても、ソヴィエトの業務においても、専門家の業務などにおいても、都市部においても、農村部においても、全く使われていないに等しかった。しかし、一方でコルホーズ労働者のほとんどや、貧困層、中流層はほとんどか、全くロシア語を知らず、ロシア語でおこなう報告は理解できないという状態だったという⁽⁵⁶⁾。ある者は「我々貧乏人はロシア語で話されても全くわからない」とも発言している⁽⁵⁷⁾。

どうやら、この時期になってもモンゴル文字による識字教育は全く成功していなかった状況であつたらしい。それ故、読み書きの手段としてはロシア語がいまだ優勢であつた。しかし、ロシア語の読み書き能力のある人は少なく、ロシア語を聞いても理解する人は少なかった。とはいえ、自分たちのことばでの読み書きもできない人が多くいたという状況であつたことがここから見て取れる。

セレンゲ方言を基にした新しい「ブリヤート・モンゴル語」と従来の西ブリヤートのことばの関係はどうだっただろうか。

ポッペはこの会議で「西ブリヤート言語文化向上の方法」という発表をおこない、西と東の方言の差異を挙げ、語彙の統一を図るよう努力するために以下のことを提案している⁽⁵⁸⁾。

- 1) コルホーズ労働者のことばにもとづく文章語、大衆に近い語彙や国際プロレタリアートの語彙を入れた文章語の創造。
- 2) 労働者に配慮した新しい術語辞典の出版
- 3) 西ブリヤート人には理解できない重要な術語について註釈を付したコルホーズ建設、経済、様々な政治問題に関する本の出版
- 4) 通訳や文章を書く仕事に従事している人々の再研修
- 5) コミュンやコルホーズによる新聞などの出版活動の促進
- 6) 文盲の一掃
- 7) ある程度西ブリヤート方言の特徴を持つ文芸作品、特に子供向け作品の執筆
- 8) 東西ブリヤート間の定期的な教師の交換
- 9) 言語学セミナーの開催
- 10) 方言の調査
- 11) 幹部の養成

55 Основные вопросы национально-культурного строительства в западных аймаках // Культура Бурятии. 1932. №1. С. 12; О повышении языковой культуры западных бурят // Культура Бурятии. 1932. №1. С. 17.

56 О повышении языковой культуры. С. 17.

57 Основные вопросы. С. 12.

58 Поппе Н.Н. Пути повышения речевой культуры западных бурят // Культура Бурятии. 1932. №1. С. 30-32.

会議では最終的にこういったポッペの提案などを考慮に入れた 20 項目の提案がなされた。特にこれらの中で西ブリヤートの方言の問題に関わるものとして注目すべきは次の 4 項目である⁽⁵⁹⁾。

西ブリヤートの方言に近づけた新「ブリヤート・モンゴル」文章語により出版活動をおこなうこと
セレンゲの学校から招いた教師による、教師の再研修コースを組織すること
西ブリヤートのために編纂した初等教育の教科書と大衆文学を出版すること
西ブリヤートの方言に近づけた文章語による文学の出版を組織すること

これらの提案は、新しい文章語と西ブリヤート方言との間に語彙的・文法的な差異が存在し、大きな問題になっていたことを示している。また、先のブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議でポッペが指摘したように、東西の交流はあったものの、東西の文化的志向の差によって語彙的な差異は拡大する可能性もあった。発表者の一人であるエグノフは西ブリヤートのコルホーズ労働者などが、東ブリヤート方言でおこなったバラードの発表を理解したと語っているが、実際のところはわからない⁽⁶⁰⁾。なお、バラードの発表を含めこの会議の発表はブリヤート語でおこなわれたものであったらしいが、議事録はロシア語で残されており、内容を語彙や文法の面から分析することは不可能である。

ブリヤート人言語学者ツェデンダンバーエフは、西ブリヤートでブリヤート語の文章語が成果を得られなかったことに関して、西ブリヤートの方言のために「特別な文章語とは言わなくても『文章方言』を作る必要があったのではないかと 1973 年に書いている。この会議で採択された提案には、ツェデンダンバーエフの意見とまったく同じものがあったが、それは実現しなかったようである⁽⁶¹⁾。現在に至っても東西ブリヤートの方言間差異の問題は放置され、西は軽視されたままである。

この会議の資料から考えると、西ブリヤートの言語的な状況は、まだこの当時、セレンゲ方言をそのまま導入するなど考えられない程度にしか教育機関、公的機関などにおける実際のブリヤート化がすすんでいなかったと言えるのではないだろうか。

2-6. ラテン文字化とポッペ、バラードとの関わり

ブリヤートにおけるラテン文字アルファベット採用までのプロセスは上述したとおりだが、最終案はポッペが提示したものであると彼自身は主張している。繰り返しになるが、アルファベット案がどのように変化していったかを確認するならば以下ようになる。1929 年ポッペが提示した案とは別の案が 1930 年 2 月に採択されるが、1930 年 5 月の新アルファベット委員会総会で認められず、他のテュルク・アルファベットとの統一を図るよう求められた。その後 1931 年 1 月にモスクワでモンゴル共和国、カルムイク、ブリヤートの代表者が参加した会議で最終的なラテン文字アルファベットが採用される。そのアルファベットは新テュルク・アルファベットに基づいたものであり、おそらく、彼の主張

59 О повышении языковой культуры. С. 18.

60 Егунгов Н. Итоги конференции по повышению языковой культуры западных бурят // Культура Бурятии. 1932. №1. С. 10.

61 Цыдендамбаев. Итоги и насущные проблемы. С. 84-85. (前注 4 参照)

している通り、ポッペの案によるものであろう。筆者がこう考えるのには理由がある。それはバラディンが英語にあるような26文字だけを使い、彼らの言語に特殊とおもわれる音素に対して文字を組み合わせて表そうとしたのに対し、ポッペや彼が所属していた新チュルク・アルファベット委員会においては基本的に一字一音で対応しようと考えていたことにある。このような視点から眺めると1930年2月に決められたアルファベット案は文字の組み合わせを使っており、それに対して1929年のポッペが提出した案と1931年1月にモスクワで開かれた言語学会議で決定された案は一字一音となっていることから、上記のような結論が導き出せるのである⁽⁶²⁾。

次に、正書法やどの方言に基づいて書くのかというような問題に議論が移るが、ここにおいてポッペとバラディンの論争が始まる。1930年、ヴェルフネウディンスクにおいて正書法会議がおこなわれたとき、バラディンは文章語に関する問題と、正書法に関する問題に関して発表をするが、彼の見解に異を唱える主張は何もなされなかった。しかし、同年にポッペは『東方の文化と文字』第6号に発表した「新しいモンゴル・アルファベット再考」において、この正書法会議の結果決まったアルファベットを批判した⁽⁶³⁾。どうやらこれがポッペによる批判の始まりのようである。

すでに検討した、1931年の「ブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議」と「西ブリヤート言語文化向上会議」においてポッペはバラディンを様々な形で批判し始めている。また、同年にはバラディンとポッペが、その年に出版したお互いの本（ポッペは『モンゴル口語実用教科書』、バラディンは『新ブリヤート・モンゴル文語の文法と文字に関する簡単な手引き』）を書いている）の書評をしている。ここにおいてバラディンも遂にポッペの批判に対して反論をし始めたようである。というのも、これらの書評と同じ雑誌に載ったバラディンの「ブリヤート・モンゴルの新しい言語文化の一連の課題」ではポッペに対する批判もなく、まだ正書法に関する細々とした論戦に入っていなかったことを示しているように思えるからである⁽⁶⁴⁾。

バラディンはこの書評で、本の中にある文法的に、または正書法的に問題のある箇所について頁を挙げながら批判し、「今もなおインド・ヨーロッパ言語学の構図と術語から脱却していないようである」と当時影響力を持っていたマルを援用して批判している⁽⁶⁵⁾。この批判のスタイルはその後、1933年に出版されるバラディンの『新文章語文法』でもみられる⁽⁶⁶⁾。

一方のポッペによる書評の批判内容は1931年のブリヤート・モンゴル語学戦線問題学術会議でおこなったものと全く同じである⁽⁶⁷⁾。ただし、この書評が書かれた時点ではまだ、

62 なお、簡単に言及するに留まったがバラディンの言語観に関しては非常にユニークなところがあるため、あらためて検討したいと考えている。

63 *Поппе Н.Н. Больные вопросы латинизации бурят-монгольской письменности // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №1. С. 55-60.*

64 *Барадин Б. Очередные задачи новой речевой культуры бурят-монголов // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №1. С. 39-46.*

65 *Барадин Б. О книге Н.Н. Поппе «Практический учебник монгольского разговорного языка» (Халхское наречие) // Вестник Института культуры Бурят-Монгольской АССР. 1931. №1. С. 51-55.*

66 *В. Бараадиин, Sine biçegiin kelenii grammatika (Ulaan-Ude, 1993), pp. 3-4.*

67 *Поппе. Больные вопросы латинизации. С. 59.*

セレンゲ方言への方言変更が決定されていなかったのも、その観点からの批判はくわえられていない。

このようにポッペもバラードインも細々としたところあげつつも、最後は比較文法研究的であるという結論を導き出し、相手をブルジョワ的であると結論づけるという同じスタイルでお互いを批判していた。

また、同じ書評ではバラードインがウラジーミルツォフやポッペなどの研究を「役に立たない」といったのがよほど気に入らなかったのか、ポッペが出した『モンゴル口語実用教科書』は「ウラジーミルツォフ、ラムステッド、コトヴィチ [といった名だたるモンゴル語学者] と自分の作品を土台に作った」作品で、バラードインにとって「極めて有益だろう」と皮肉を込めて述べている⁽⁶⁸⁾。

この後、何度となく繰り返されるこの二人の間でおこなわれた議論を概観すると、ポッペがバラードインを批判し、バラードインがポッペに反論するパターンの構図が見える。

ポッペが1933年に著した『ブリヤート・モンゴル語学』では、ブリヤート語の言語政策において彼が中心的な役割を果たしたような印象を与えようとしている⁽⁶⁹⁾。しかし、バラードインを批判し続けた事実は、正書法、方言の選定、語彙の問題など文字以外の分野について、ポッペが完全に主導権を握れなかったことを示しているように思えるのである。

しかし、その1933年の初頭、バラードインは『ブリヤートの文化』誌に「私の過ち」という自己批判の文を送っている。送らなければならなかった背景は明らかでないが、ここでは1)「レーニンと少数民族」という論文で「マルクス-レーニン主義の思想を仏教の教えと同一視した」こと、2)1926年の民族文化会議での汎モンゴル主義的な発言などには誤りがあったと自己批判をしている⁽⁷⁰⁾。「私の過ち」は『ブリヤートの文化』の編集先であるブリヤート文化研究所に書簡の形で出されたらしく、その書簡は1933年2月8日に審議された。ここでバラードインは「このような(政治的、理論的な)過ちはバラードインが述べたような偶然の過ちではなく、明らかに民族主義的で汎モンゴル主義的な思想の現れであり、プロレタリアート社会主義の前進に反対する余命幾ばくもないような階級に対する闘争において、我が国におけるそのような階級の抵抗による階級闘争の発生と疑いなく結びついていた組織的な性質のものだった」と非難された⁽⁷¹⁾。このことによって、彼の影響力が減じたことは明らかである。

1933年7月14-18日、ヴェルフネウディンスクでおこなわれた「言語と文学に関する地方会議」にバラードインは参加している。会議には60人以上が参加し、論争となっているブリヤートの正書法の問題についてのバラードインの報告が審議検討された。しかし、すでにこのころから主導権はバラードインの手から離れ、彼の意に添うような結論は得られなくなっていた⁽⁷²⁾。

1933年、バラードインは『ブリヤート語文法』を出版し、1935年には『言語文学関係術語ロシア語ブリヤート語辞典』を出版した。さらにラテン文字で文学作品を幾つか書

68 Поппе. Больные вопросы латинизации. С. 59.

69 Поппе. Бурят-монгольское языкознание.

70 АБНЦ, ф. Р471, оп. 132, л. 7.

71 АБНЦ, ф. Р471, оп. 132, л. 1.

72 Цыдендамбаев. Итоги и насущные проблемы. С. 71.

くなど、創作活動は衰えなかった。しかし、同じ1935年、彼はレニングラードの科学アカデミー東洋学研究所へと送られ、そこからレニングラード大学へモンゴル語教師として派遣された⁽⁷³⁾。1936年、ポッペからベルタガエフに宛てた手紙にはその一年後の状況がこう描かれている。「バラディンが来た。まだ失業中だが、見つかるチャンスはほとんどないようだ」⁽⁷⁴⁾。彼はレニングラードでも苦しい状況にあったようである。1937年2月20日、バラディンはレニングラードで「反革命組織のスパイ」として逮捕される。1937年8月24日に彼はレニングラード軍事法廷で死刑の宣告を受け、その後間もなく刑は執行され、彼は59才でその生涯を閉じる⁽⁷⁵⁾。

2-7. 文章語の基礎となる方言の再度の変更

ハルハ方言から、セレンゲ方言に文章語の基礎となる方言を移し替えた理由は、民衆の話し言葉を基にすべきであるというものであった。ブリヤート語にとってハルハ方言は「外国の言葉」でありブリヤートの民衆の言葉ではないと見なされたのである。しかし、変更後、実際にセレンゲ方言に特徴的な言葉使いが文章語に反映され、ハルハ方言とはっきりと違うものになったとはいえず、差異は非常に曖昧なままであった。また、セレンゲ方言はブリヤート人全体のうち10%ほどが話す南部方言であり、1-1で指摘したとおり、残りの90%が話す東部・西部方言とは音韻論的、形態論的にきわだった差異を抱えていた⁽⁷⁶⁾。そして、何よりもセレンゲ方言はブリヤートの中心都市ウランウデで話される方言ではなかった。また、西ブリヤート方言の話者にとっては語彙的にも文法的にも非常に遠かった。人口的にも多くなく、政治経済の中心地の方言でもないセレンゲ方言の地位は不安定であり、その地位を支えるものはモンゴル語との結びつきのみだった。

このような状況からみれば、セレンゲ方言はハルハ方言と同じであると見なされ、ブリヤートの独自性をはっきりさせるために、他の方言を標準方言としなければならないと主張するものが出てくる可能性は十分にあった。

2-7-1. 1936年の言語会議

1936年6月1日－7日、ウランウデにおいてブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会付属国立言語文学歴史研究所主催の言語会議がおこなわれた。

この会議の参加者は120人。この会議では3人の正報告と8人の副報告がなされた。バラディンはすでにレニングラードへ追放されていた。一方のポッペはこの会議に参加

73 Неизвестные страницы истории Бурятии. Улан-Удэ, 1991. С. 18.

74 Хамарханов А.З. Письма Н.Н. Поппе Т.А. Бертагаеву // Mongolica. 1998. IV. С. 103.

75 バラディンがこういった運命を辿った原因にどれほどポッペが関わっていたかはまだ明らかでない部分がある。というのも筆者が本論文執筆時までに確認できなかった重要な資料があるからである。それはブリヤートに残る KGB 資料で、「バザル・バラディンについて」というポッペによって書かれたものである。このポッペによるバラディン評がいつ頃書かれたものであるかはわからないが、当然バラディンの生前に書かれたものであると予想され、従って彼の逮捕に何らかの関係があったことも考えられる。この資料を閲覧するためには複雑な手続きが必要とされ、1998年にこの資料の存在を確認したが、いまだに閲覧できていない。Неизвестные страницы. С. 19-21.

76 Барадин Б. Спорные вопросы орфографии бурят-монгольского ново-литературного языка // Культура Бурятии. 1932. №1. С. 20-21.

し、「ブリヤート・モンゴル文章語と方言との関係」「ブリヤート・モンゴル語の文法的分類について」という二つの発表をしている⁽⁷⁷⁾。

会議の後、南部方言のセレンゲ方言から東部方言のホリ方言へ変更する決定にブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会議長として署名するダンピロンは「ブリヤート・モンゴル文章語の創造の決算と将来の課題」というそれまでの言語政策の決算報告的な発表をおこなっている。

この中でまず彼は、それまでの言語政策を概観する。キリル文字採用を主張した西ブリヤートのバドマエフなどのロシア化を肯定する見解を批判し、また、バラードインや、ツィビコフを汎モンゴルの意見を持つものとして批判した⁽⁷⁸⁾。

また、その際に1929年にバラードインが「ブリヤート・モンゴル言語文化向上の諸問題」を発表して、ラテン文字化運動が開始された後も1926年の文化民族会議での決定通り、モンゴルのハルハ方言を標準方言にする方針をとり続けたことを批判し、さらにリンチネが「ブリヤートのもの」を嫌ったことを批判した⁽⁷⁹⁾。

しかし、一方で1931年9月に共産党地方委員会が、ハルハ方言からそれとほとんど変わらないセレンゲ方言を採用したことは批判していない。そればかりか逆に、「ブリヤート・モンゴル労働者の生きた話し言葉から」離れてはならないという文章が盛り込まれたことを評価し、この時から「ラテン文字化の実際の重要な課題」への取り組みが始まったとしている⁽⁸⁰⁾。

追放されたバラードインに関しては、1933年に出されたバラードインの『ブリヤート語文法』の中から幾つかの単語を抜き出し、「この本には彼の以前の「文章語のもととなる方言をハルハ方言にしようとした」計画の名残が全て収まっている」と激しく非難する⁽⁸¹⁾。

そして「言語建設の理論と実践から残りのバラードイン一派を完全に根絶しなければならない」と呼びかけ、さらに方言研究の、言語学の領域でのマルクス・レーニン主義の実践を主張し、「この会議では生きた話し言葉へのさらなる接近という意味での正書法の改善、明確化の問題について真剣な議論をしなければならない」と提案する⁽⁸²⁾。

さらに彼は1931年の共産党地方委員会の批判に立ち戻り、批判の上で作りあげようとした文章語が目指すべき最優先の問題が「幅広く様々な層の大衆にとって理解しやすいこと、親しみやすいこと、そしてそれらの人々の話し言葉との或る一定の関係」にあることを確認する⁽⁸³⁾。そして、「ブリヤート諸方言の中でもっとも発展し、もっとも完全な文法形態」を持っている「東ブリヤート方言がブリヤート・モンゴル文章語の基盤となる方言とならなければならない」と彼は主張したのである⁽⁸⁴⁾。

77 Бурят-Монгольская правда. 16 июня 1936. С. 1.

78 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 5-14.

79 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 15-17.

80 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 18, 22.

81 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 24-25.

82 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 25.

83 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 31-32.

84 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 33.

2-7-2. ホリ方言の採用

こうした議論を受け、1936年8月20日にブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会幹部会および共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会ビューロー幹部会（1936年8月20日 No.152/8）において次のような決定が出される⁽⁸⁵⁾。

1、ブリヤート・モンゴル文章語は、発展の出発点となる原則、特にブリヤート・モンゴル語の言語的な諸問題についての理論構築において、（ブリヤート・モンゴル民族民主主義者が決めたモンゴル文字あるいは人工的に広められたハルハ・モンゴル語の規範ではなく）ブリヤート・モンゴルの労働者の大部分が言語的に持つ全ての音声的、文法的な特徴を反映し、かつ、新しい社会主義的、国際主義的な形式と言語自体の発展の概念を考慮に入れた、人民大衆の理解しやすい平明な言語〔文章語〕でなければならない。

ブリヤート・モンゴル文章語はブリヤート・モンゴル語の現存する全ての方言の語彙を持たねばならず、旧モンゴル文語の肯定的な面や現代ハルハ方言の形式的な面での、内容の簡明さや明解さを学んだものでなければならない。

2、このような原則に対応するようなブリヤート・モンゴル語に独特な諸規範と、東ブリヤート・モンゴルの H〔ホリ〕方言を新ブリヤート・モンゴル文章語の基礎としたブリヤート・モンゴル語の文法を再構築する。

3、現存のブリヤート・モンゴル新アルファベットに次のような修正を加える

- a) 音素 /h/ を表すのに現在使われている文字 s に代え、文字 h を使用する
- б) 文字 s は今後、借用語、特にハルハ・モンゴル語の *sojol* や *bolbosorol* といった類のブリヤート・モンゴル語に入った単語の音素を表すものとして使用される
- в) 文字 c と ç は借用語と固有名詞を表すものとしてのみ保持される
- г) 文字 ş はこれまで用いられていた ç や s の代わりにブリヤート・モンゴル語で使用される
- д) 音素 x を表すために、現在使用されている文字 k に代え、文字 x を使用する。文字 k は借用語と固有名詞の音素 k を表すものとしてのみ保持される
- е) *kylytyure* や *maldanь* といった音節の最後の軟音化された子音を表すために文字 ь を使用する
- ж) *ө* と *у* の短母音はブリヤート共和国内の大衆の大部分の方言では判別の困難な音素であるので、ただ <y> 一つで表し、文字 *ө* も二つ連続した形 (*ө ө*) で *bөөre*、*өөрөө* などのような単語の長母音を表すものとして残す

...

ブリヤート・モンゴル自治共和国中央執行委員会委員長 И. Дампилов

全連邦共産党ブリヤート・モンゴル地方委員会書記 М. Элбанов

「旧モンゴル文語の肯定的な面や現代ハルハ方言の形式的な面での、内容の簡明さや明解さ」を考慮すべきとする点や、ブリヤート語に定着した語彙に関してはそのまま保持する点において、ハルハ方言への配慮はあったが、こうして決定された項目は全てモンゴル語に近い発音表記からブリヤート語独自のものと変更するものであった。

85 Дампилов. Итоги языкового строительства. С. 46-48.

2-7-3. ポッペは標準方言をホリ方言にすることを知っていたのか

標準語の基礎となる方言の変更といった大きな変化の背景には権力闘争があり、変更にもなって担当者が変わることもしばしば見られる⁽⁸⁶⁾。それまでのブリヤートにおける言語政策に関して中心的な役割を果たしてきたパラディンとポッペのうち、パラディンは表舞台から消え去っていたが、果たしてポッペはどうだったのだろうか？

ブリヤート学術センター所蔵の資料の中には、1936年1月、レニングラードにいるポッペに、ブリヤート・モンゴル語の辞典の監修を依頼する文書が残されているが、言語学会議への参加の要請もその同じ手紙でなされていた⁽⁸⁷⁾。ここで監修を依頼されていたブリヤート・モンゴル語の辞書については、どうやらこの会議の結果から出版されることはなかったようである。が、会議が終わり、標準方言の変更が決定されると、この変更に伴いブリヤート文化研究所は、すでに印刷所に入っていて脱稿済みであった『ブリヤート・モンゴル語文法』に修正をほどこす必要があるという理由で印刷所に返却を要請している⁽⁸⁸⁾。その後、改訂して1938年に出版された『ブリヤート・モンゴル語文法』の前書きには、返却を要請して出版が遅れた事情などは何も書かれていないが、このことから彼は何も知らなかったのではないかと考えることもできる⁽⁸⁹⁾。

しかし、ポッペと弟子のベルタガエフとの間でやりとりされた手紙には、必ずしも彼が何も知らなかったといえない事実が書かれている。1936年から1941年まで、この二人の間で交換された手紙の中には、ホリ方言をもとにした新しい正書法に関してやりとりしているものが残っているからである⁽⁹⁰⁾。

その手紙でポッペはベルタガエフの質問あるいは要請に応じて助言を与えている。それは例えば以下のようなものである。

…正書法に関してですが、いくらかブリヤート化させるべきなのかと私は思います。たとえば、対格の接尾辞ですが、-iigi は必然的に -iiji に替え、共同格の -taigaa は -tajaa(akatajaa) に替えるべきでしょう。h で発音する方言 [つまりホリ方言] が政治的に許容できるもので時期的に適切であるということに関して、私にははっきりとしたイメージがありません。また、もしかしたら ø を排除すべきなのかも知れません。つまり kyl [足], nyker [kyløør, nykerøør など: 同志] などと書くということです。というのも、ツォンゴル (セレンゲ) の人々でさえ、ø と y を取り違えるからです。それから、- を入れて書くところや、分かち書きするところをはっきりさせるべきでしょう。例えば jabaasan jabaa san, kyn saa, kyn-saa, kynsaa [もし人が] というものです。ここには、大きな意見の不一致があります。私は- を入れて書きます。私は個人的には c や ç という文字の排除や、[hain [よい], sahan [雪] などの] h と発音する方言に反対するものではありません。また、k とは別に x を導入すべきでしょう。たとえば kara [黒] ではなくて xara とか。それから、外来

86 同じモンゴル系のカルムイクにおいて1920年代におこなわれた言語政策では、そのようなことが起こっている。詳しくは、荒井幸康「1920年代のカルムイクのことば」『モンゴル学会紀要』第32号、2002年、13-28頁。

87 АБНЦ, ф. Р471, оп. 184, л. 52.

88 АБНЦ, ф. Р471, оп. 184, л. 167.

89 Поппе Н.Н. Грамматика бурят-монгольского языка. М.-Л., 1938. С. 3-6.

90 Хамарханов. Письма Н.Н. Поппе. С.103-106.

語や国際語にかんしては歪ませずに Kaarl Maargs ではなくて Karl Marks などと書くべきだと思います。最近、私は Magsiim Goorki をいうのを見ました（何と驚くべきものでしょう！）⁽⁹¹⁾

残念ながら、この手紙には日付が明記されていない。しかし、ブリヤート人研究者ハマルハーノフによって紹介されたこの手紙は 1936 年 3 月 25 日と同年 11 月 7 日の日付のある手紙の間に挟み込まれて掲載されている。ハマルハーノフ自身が何を根拠にこの二つの日付の間にこの手紙をおいたのかはわからないが、もし、この配置を信じるとするなら非常に興味深いことがわかる。というのも言語学会議はちょうどこの間の 6 月におこなわれているからである。ここに残されている助言と前記のホリ方言への移行を記した決定と比べれば、手紙は決定以前に書かれていたものである可能性は十分にある。さらに 6 月の会議以前のものであることが明らかとなれば、彼がホリ方言に変わることを事前に知っていた決定的な証拠となるからである。個人的な意見という形で書かれているが、この手紙で彼ははっきり、ホリ方言への意向には反対しないと書いている。また、「h で発音する方言が政治的に許容できるもので時期的に適切であるということに関して、私にははっきりとしたイメージがありません」という表現から判断するなら、会議での決定以前であっても、あるいは以後であったとしても、彼以外の誰かがホリ方言採用の主導者であったことを示唆しているように思える。

3. キリル文字化へ（1938 ～）

文章語の基礎となる方言をホリ方言への変更を決めた翌年の 1937 年、ソヴィエト領内では大粛清が始まる。この粛清によりブリヤートの言語政策に関わった人々も多くが命を落とした。それに前後してソ連領内の文字を与えられた民族語におけるラテン文字の使用が次々と廃止されてゆく。ある言語はキリル文字に文字を変え、他の言語は文字自体の使用が廃止された⁽⁹²⁾。キリル文字化の波がブリヤートの岸に押し寄せるのは、それからほどない 1938 年 6 月のことである。

1938 年 6 月 20 日、参加者 55 人を擁するブリヤート国立言語文学歴史研究所の言語会議が開催された。この会議においてダシツィレノフが術語、ベリガエフがラテン文字からキリル文字への文字の変更、ダシエフがブリヤート・モンゴル語の学校における教育について発表した⁽⁹³⁾。

すでにこの会議が始まる前にキリル文字化案がサンジェーエフ（「ブリヤート・モンゴル文字と正書法の基礎計画」）、ダシエフ（「ロシア文字への移行計画」）、アモゴロノフ（「ブリヤート・モンゴル語文字としてロシア文字を採用するための計画」）によって提出されていた。

91 Хамарханов. Письма Н.Н. Поппе. С.103.

92 信じがたいことだが 5 万人以下の少数民族言語において実際にこの時期キリル文字に移行せず「表記を失った」言語が存在する。詳しくは Казакевич О. Языки малочисленных народов России // Человек. 1996/4. С. 56-57. を参照のこと。「表記を失った」言語の一つ、ウデヘ語には 1930 初頭-1936 にラテン文字表記が存在したが、キリル文字によるアルファベットは作られなかった。1980 年代に学校にて言語を教育する運動が活発となり、1998 年文法書が出版されている。詳しくは Кормушин И.В. Удхейский язык. М., 1998. С. 8-9 を参照のこと。

93 Цыдендамбаев. Итоги и насущные проблемы. С. 77.

会議では参加者ほとんど全員がブリヤート語のキリル文字化に賛成したという⁽⁹⁴⁾。最終的にアルファベットと正書法案として選ばれたのはサンジェエフの計画を基礎にしたものであった。そして、この草案は1939年初め、ホリ県、セレンゲ県の労働者集会や、専門家の間で審議されたという⁽⁹⁵⁾。

最終的にこの案でブリヤート語の文字をキリル文字とすることが、ブリヤート・モンゴル自治共和国最高ソヴィエト令によって1939年5月1日に「人民の要求を考慮し」決定された。この案に積極的に参加したのはГ.Д. サンジェエフ、Д.Д. アモゴロノフ、Д.Д. ダシエフ、Ч.Ш. シャグダロン、М.Н. イメヘノフ、Д.Д. ドウガルジャボン、Д.М. ミジドンらであった⁽⁹⁶⁾。

＜図3＞ 1939年に採用されたキリル・アルファベット

АЛФАВИТ И ОСНОВЫ ПРАВОПИСАНИЯ БУРЯТ-МОНГОЛЬСКОГО ЯЗЫКА.											
Бурят-монгольский алфавит состоит из следующих 36 букв:											
Аа	Бб	Вв	Гг	Дд	Ее	Ёё	Жж	Зз	Ии	Йй	Кк
а	бэ	вэ	гэ	дэ	е	ё	жэ	зэ	и	несло- говое й	ка
Лл	Мм	Нн	Оо	Өө	Пп	Рр	Сс	Тт	Уу	Үү	Фф
эль	м	эн	о	өө	пэ	эр	эс	тэ	у	ү	эф
Хх	Һһ	Цц	Чч	Шш	Щщ	Ъъ	Ыы	Ьь	Ээ	Юю	Яя
ха	һа	цэ	чэ	ша	ща	твёр- дый знак	ы	мяг- кий знак	э	ю	я

(『ブリヤート・モンゴル語アルファベットと正書法の基礎』1939年より)

1939年7月にははやくもキリル文字のパンフレットが出版される。キリル文字化は方言変更を伴わなかったため、正書法的には1938年のポッペの『ブリヤート・モンゴル語文法』に書かれたラテン文字での正書法の原則がほとんど踏襲されているようである。

ブリヤート語の表記をラテン文字からキリル文字にとりかえる根拠を、1939年に発表されたベリガエフの論文「ロシア・アルファベットへブリヤート・モンゴル語の表記を移行することに向けて」では次のように説明している。

- 1) ブリヤート・モンゴル語の全ての音声を表すためにはラテン・アルファベットの字母は充分ではない
- 2) 綴りの多様な構成やコンビネーションの存在、一つの音を伝えるために二つ文字を書かなけれ

94 2005年春、この会議に参加した学者の証言をとることができた。Б.Д. Цибиковという歴史学者であるが、彼はこの会議に偶然参加し、何も知らずにキリル文字化反対を述べた。このため彼はその後、一時期差別にあったという(2005年2月7日、ウランウデでのツィビコフ氏のインタビューにて)。

95 Цыдендамбаев. Итоги и насущные проблемы. С. 77-78.

96 Алфавит и основы правописания бурят-монгольского языка. Улан-Удэ, 1939. С. 1; Цыдендамбаев. Итоги и насущные проблемы. С. 77-78.

ばいけないこと

- 3) ソヴィエティズムと国際主義の科学技術用語が必要となったブリヤート語において、ラテン文字では発音を歪めずにはこれらの単語を伝えられなくなってしまっている
- 4) 二つのアルファベットの同時並行学習は、子供たちは勿論のこと、成人にとっても紛らわしくて大変難しいものである⁽⁹⁷⁾

上記からロシア語がかなり意識されていることが窺える。特に、4) は1938年ロシア語の学校教育における義務化が中央政府から布告されていることと関連しており、キリル文字のロシア語と紛らわしいので民族語をラテン文字で書くのを止めてしまえというかなり暴力的な論である。

このように、キリル文字化の理由として、ロシア語との関係を強調する例は、その他のソヴィエト領内の民族言語やモンゴル語でもあった⁽⁹⁸⁾。

こうしてハルハ方言を意識し、ハルハ方言をもとにした言語を作り上げようとしたブリヤート・インテリゲンツィアの試みは、ブリヤート南部の方言から、ウランウデ近郊の方言への文章語の基礎となる方言の変更、そしてロシア語を意識したキリル文字化によって終わる。モンゴルにおいても1941年からキリル文字化がなされたが、それはブリヤートとは別の正書法を採用したものであった。

結 論

以上で検討したように1929年から1939年に至るまでの10年間ブリヤートにおける言語政策には様々な変化があった。

民族運動とそれにとまなう啓蒙活動が始まって以降1928年まではキリル文字、ラテン文字、ワギンダラー文字といった文字による言語改革案が提示されたが、一時期盛り上がったワギンダラー文字による言語教育改革運動を除けば、実現からはほど遠く、古くからあったモンゴル文字が主流であり続けた。

1929年、キリル文字化が開始されると、アルファベットや文章語の基礎となる方言に関する議論が立ち現れる。アルファベット案は1910年にラテン文字化案を提案したバラーディンと、レニングラード大学の言語学者ニコラス・ポッペが1929年、同時に作成し、同時にラテン文字化案を作成し発表する。1930年2月にはバラーディン案が決定されたが却下され、1931年1月にポッペ案が最終的に決定される。

文章語の基礎となる方言に関してはキリル文字化開始当初においては、モンゴル語と同じハルハ方言を基礎としようとしていたが、「外国の方言」という理由で却下され、ハルハ方言に近いブリヤートの方言、セレンゲ方言を採用することにする。しかし、セレンゲ方言は、政治経済の中心地で話されている有力な方言ではなく、人口的には10%を占め

97 Бельгаев Г.Ц. К переходу бурят-монгольской письменности на русский алфавит // Записки бурят-монгольского государственного научно-исследовательского института языка, литературы и истории. Улан-Удэ, 1939. С. 5.

98 例えば Исаев. Языковое строительство. С. 254; Шагдарсүрэн. Монголын утга соёлын товчоо. Улаанбаатар, 1992. Х. 128; 田中克彦著『言語の思想』、163頁など。

るハルハ方言に近いだけの方言であったため不安定な状態にあった。こうして、1936年6月の言語学会議でセレンゲ方言から、政治経済の中心地の方言、ホリ方言への変更が決定される。

しかし、ラテン文字自体の運命もそう長くなかった。1938年から着々と準備が進み、1939年5月、キリル文字化が決定される。ここで決定された正書法は若干の変更はあったものの現在まで使われ続けている。

こうして1929年にあったブリヤートの言語状況は、ほぼ10年間で全く違ったものとなった。モンゴル文字を使っていた時期はさておき、ラテン文字化初期においてもハルハ方言というモンゴルの方言の採用を主張することによって、モンゴルとのコミュニケーション手段を保つことは重要と考える人々が言語政策の中心にいた。しかし、最終的には、ブリヤートにおける有力方言であるホリ方言による、ブリヤートが独自に言語を創造していくことへ路線を変更したことをあらわしている⁽⁹⁹⁾。

99 残念ながら、本稿はブリヤートの言語政策において大きな役割を果たしたボッペとバラーディンに注目しすぎたため、他の意見を汲むことができず、この方言変更のプロセスにおいてどのような論争があったかについては十分に論じ切れていない感がある。恐らくは同じモンゴル系のカルムイク人において1920-30年代に起きた言語政策における知識人たちの争いに近いものが起こったかと考えるが、十分な資料を得ることができなかった。今後の課題としたい。

The Buryat Language Policy in 1930s: Problems of the Alphabet Reform and the New Written Language

ARAI Yukiyasu

The 1930s were a time when the Buryat language experienced drastic changes. It changed its alphabet twice and the dialect on which the standard language should be based three times. There are several papers on Buryat language policy in the 1930s, but they were all written before the fall of communism. Since no papers have appeared on this theme since then, I would like to re-examine why the Buryat language was changed so much and what happened in Buryat language policy in the 1930s.

The Buryat are a Mongolic ethnic minority in Siberia. From the awakening of their national consciousness at the beginning of the twentieth century, a group of Buryat intellectuals attempted to educate and modernize their people to make their nation survive. Some of these intellectuals thought that modernizing their language would be the fastest way to educate their people. They used the Mongolian alphabet for writing. By then this alphabet been used for more than 200 years, especially among the Eastern Buryats, but the spelling, vocabulary, and word usage were different from the spoken language. Some of the intellectuals introduced reforms to the Mongolian alphabet; others advocated adopting the Latin alphabet, but both of these attempts stopped when World War I broke out in 1914.

After the Russian Revolution, an affirmative language policy was introduced to the indigenous peoples living in the Soviet Union. As a result Buryat intellectuals participated more actively in educating their people. Discussion on language reform again arose. Some advocated using the Cyrillic script while others advocated the Latin alphabet, but these attempts were not realized, and the use of the Mongolian alphabet continued.

In the 1930s, a movement called Latinization arose in the Soviet Union. This movement started in Azerbaijan at the beginning of the 1920s and quickly spread among the Turkic people. It also caught the central government's attention. Lenin even once referred to this movement as the "Revolution from the East." In 1929, the central government adopted a resolution prohibiting the Arabic script and introduced the Latin script in its place. Other ethnic minorities, especially those whose languages never had any writing systems, followed this movement and the movement became the main part of language building. These were language policies that would provide ethnic minorities in the Soviet Union with new alphabets, grammar, orthography, and vocabulary so everyone could understand communism in their own language and enjoy autonomy in their own language.

This movement reached Buryatia in 1929. Again Buryat intellectuals planned to Latinize their language. Documents preserved in the Archive of the Buryat Science Center show that, by coincidence, there were two people planning for Latinization at the same time. One was in Leningrad and the other in Buryatia. The one in Leningrad was Nicolas Poppe, a Mongolist and Professor of Leningrad University who made his Latinization plan by the order of the Central Committee for the New Turkic Alphabet. The other was Bazar Baradievich Baradin, a Buryat education activist who advocated Latinization from the beginning of the 20th century and even published a book on Buryat folklore written in the Latin alphabet in 1910. Poppe and Baradin were the two major actors of language policy in Buryatia during the Latinization period.

After many debates and conferences, Poppe's plan was finally adopted as the "Latin Alphabet for Buryats" in January 1931 at a conference held in Moscow for all Mongolic peoples.

The problem of the alphabet was settled, but the problem of the dialect on which the Buryat written language should be based arose. Buryat mainly consisted of three dialects, eastern, western, and southern. In the eastern and western dialects, there were many grammatical items in common, but lexically and alphabetically they were different. The east used Mongolian, while western Buryats were more familiar with Cyrillic. Eastern and southern Buryats were lexically and alphabetically the same, but grammatically different. The southern and western dialects were very different from each other. It was hoped that the written language would unite those people together into one, but it was very difficult to overcome the gap between the eastern-southern dialects and the western dialect.

It was originally the Khalkha dialect that Buryat intellectuals who worked on language policy claimed first, so as to unite their written language with Mongolian. This was turned down by the Executive Committee of the Communist Party in the Buryat Oblast, since Khalkha is a Mongolian dialect, not Buryat. So the Selenge dialect, a southern dialect, was chosen since it was a Buryat dialect that was very close to the Khalkha dialect. The Selenge dialect was a peripheral dialect, only spoken by 10% of the Buryat population. From the beginning of the 20th century on, many Buryat intellectuals acted like avant-garde agents for the Mongolian world to modernize them all, some really working to help Mongolia's nation building. Thus, those intellectuals could not imagine separating from the Mongolian world.

In June 1936, a conference on language was held in the capital city of Buryat ASSR, Ulan-Ude. By resolution of this conference, the dialect on which to base the standard written language was changed from the Selenge dialect to the Khori dialect, which was the eastern dialect. The Khori dialect was phonologically and grammatically very different from standard Mongolian, but was a major Buryat dialect, spoken around the capital city of Ulan-Ude.

We hypothesize that this change emerged from controversies between intellectuals, those who wanted to unite their written language with Mongolian and those who wanted to make the written language based on Buryat's eastern dialects. The latter finally assumed power. As result of this change, Buryat went a different way from the Mongolian language and the rest of the Mongolian-speaking world.

Poppe also made some speeches at this 1936 conference, but a letter Poppe sent one of his students, T.A. Bertagaev, a linguist, sometime in 1936, showed that he no longer played a major role in language policy.

Baradin did not attend this conference since he was criticized in 1933 for his activities in the 1920s, and he quickly lost his influence. In 1935 he was sent to Leningrad where he was arrested in 1937 and executed as a victim of the Great Terror. Many Buryat intellectuals who were involved in language policy were also arrested and purged.

In 1939 another change was made to the Buryat language. On the May 1, 1939, the Supreme Soviet of Buryat ASSR decided to change its alphabet from Latin to Cyrillic.

From 1929 to 1939, there were many changes for the language of the Buryats. The alphabet changed from Mongolian to Latin, and then from Latin to Cyrillic. The dialect on which the written language was based changed from Khalkha to Selenge, and then from Selenge to Khori. Due to these changes, the Buryat written language was separated from the Mongolian written language and became an independent language.